

若い世代の人たちの、神話や伝説、昔話にたいする関心は、「妖怪ブーム」とともに相変わらず強いようです。また最近では「パワースポットブーム」の影響で、神社や神々の世界に興味をもつ若者も増えてしていると聞きます。しかし神話・伝説・昔話、あるいは神社の成り立ちや神々の歴史を総合的、学問的に説明、紹介してくれる書物は意外と少ないようです。とりわけ最新の研究成果を踏まえ、しっかりとした内容でありつつ、初心者にも理解できるような入門的な本は限られているのではないのでしょうか。

そこで本書の登場です。この本では「そもそも神話とは何か」「なぜ人びとは神々について物語ってきたのか」「伝説と昔話は違うのか」「なぜ妖怪は信じられてきたのか」「海外の神話と日本神話との繋がりはあるのか」といった、多くの人たちが抱く疑問に答えてくれる、研究者たちの最新の研究成果を紹介しながら、神話・伝承学の魅力に分け入っていきます。

まず簡単に本書の内容を紹介しましょう。第一章では誰もが知る有名な「桃太郎」は、なぜ「桃」から生まれてくるのかという疑問を出発点に、神話・伝承学の総論を展開します。第二章は、『古事記』『日本書紀』の神話を、スサノヲ、オホクニヌシ、アマテラスといった神々の「成長」の物語として読み解き、第三章では「シャーマン」と目される稗田阿礼^{ひえのあれ}を取っ掛かりに、日本神話の世界を「シャーマニズム」の視点から読み直します。続く第四章では、『記』『紀』の書かれた神話にたいして、口承で伝えられた神話の現場を求めて、沖縄、台湾の世界に分け入ります。ここでも出逢うのはシャーマンの存在！

さて「神話」といえば、「古代」の独占物と思われがちですが、第五章から第七章では、多くの読者が初めて出会うに違いない「中世神話」の世界を紹介していきます。一般に中世といえば「仏教」の時代とされていてい

すが、中世の人びとは、最新の仏教の知識、学問を利用して、古代神話の神々を解釈し直し、中世独特な神々の世界を作り出していったのでした。中世は「神話」の時代でもあったのです。第五章では仏教と神々とが結び着く「中世神話」の総論的な説明を、第六章では荒ぶるスサノヲが中世神話として変貌し、さらに「韓国」の神話とも結びつく様相を紹介し、第七章では八幡神を中心に仏教と神々のダイナミズムを解き明かします。

続いて神話と伝説・昔話の繋がりを問い直します。まず第八章では、「妖怪」がどのようにして人びとに信じられていくのか、そのメカニズムを土佐の河童伝承を素材にして解明し、第九章では民俗学者・柳田国男の研究の紹介とともに、「柳田以降」の新しい伝説・昔話研究の方向を探ります。

第一〇章では、「ギリシア神話」の芳醇な世界を紹介しつつ、「神話学」という学問の動向や近現代の神話解釈の問題などを考えていきます。そして第十一章では、『古事記』が日本の歴史のなかで、どのように読まれてきたかを説き明かしながら、「神話」が、それぞれの時代にいかに影響を与えたかを見直していきます。

そのほか、マンガ、歌舞伎、教科書と神話との関係、また仏教説話と昔話、あるいは聖地巡礼や祇園祭、さらに偽史と民俗の関係などトピックを取り上げたコラムもあります。読者は、「これは?」と思った話題から読み始めてくださってもかまいません。

それでは、「神話・伝承学」の幕を開けましょう。

目次

まえがき

第一章 「神話・伝承学」とはなにか	斎藤英喜	3
第二章 『古事記』、神々の世界を読む	斎藤英喜	21
第三章 日本神話とシャーマニズム	アンダソヴァ・マラル	43
コラム1 ヤマトタケルの変貌——「家族の神話」としてのヤマトタケル	稲生知子	64
第四章 もうひとつの「古代神話」——沖縄・台湾	渡部亮一	66
コラム2 『日本霊異記』と昔話	井熊勇介	84
コラム3 聖地巡礼の系譜	花川真子	86
第五章 神仏習合と中世神話	船田淳一	88
第六章 スサノヲの変貌と「韓国神話」	権 東祐	111

第七章	仏教と神々——八幡神を中心に……………	村田真一	133
第八章	妖怪譚——土佐の河童伝承を事例として……………	梅野光興	155
第九章	神話・伝説・昔話への新しい視点……………	武田比呂男	175
コラム4	祇園祭と牛頭天王……………	鈴木耕太郎	198
第一〇章	ギリシア神話を学ぶ……………	庄子大亮	200
コラム5	アニメ・漫画と神話——『蟲師』……………	ブレモセリ・ジョルジョ	222
第十一章	『古事記』はいかに読まれてきたか……………	斎藤英喜	224
コラム6	「偽史」が創り出す民俗——『東日流外三郡誌』を中心に……………	星 優也	246
コラム7	絵本や教科書に描かれた古事記神話——「児童向け古事記」の歴史……………	谷本由美	248
ブックガイド	神話・伝承学をさらに究めるために……………		250
あとがき			
執筆者紹介			

第一章 「神話・伝承学」とはなにか

斎藤 英喜

はじめに

黄泉^{よみ}の国のイザナミの死体をイザナキが見たために、人間世界に生と死が始まる。荒ぶる英雄スサノヲが怪物ヤマタノヲロチを倒し、クシナダヒメを救出する……。お馴染みの日本神話のエピソードだ。またこれらの神話が、ギリシアのオルフェウス神話やベルセウス・アンドロメダ神話と類似していることは、知っている人も多いだろう。一般に「神話学」といった場合、日本神話と他の国々の神話との比較をして、その共通点や類型、伝播、構造のあり方を研究する学問と認識されている。「比較神話学」とも呼ばれる。

一方、一寸法師や桃太郎などの昔話がどのように分布し、変容していくか、あるいは山の神の伝説、河童の伝説などの成り立ちや背景を探ることは「民俗学」という学問がテーマとしてきた。昔話や伝説の古層に「神話」があり、さらにそこから日本人の「固有信仰」を探るということは、日本民俗学の創始者

である柳田国男（一八七五―一九六二）が提起した問題だ。民俗学のなかの「口承文芸」「民間信仰」研究というパートである。

したがって、「神話」について勉強したい人と「伝説」「昔話」に興味や関心をもつ人は、それぞれ別のジャンルの本にあたることが多い。ひとつの本で、神話、伝説、昔話の最新の研究と一緒に学べるものは、意外と少ないようだ。

本書がめざす「神話・伝承学」とは、簡単にいえば、日本神話と昔話・伝説と一緒に研究する学問といってもよい。もう少し専門的にいえば、これまで神話学、国文学、民俗学、人類学、歴史学などといったように分断されてきた学問ジャンルを横断し、それぞれの研究の最新の成果を総合し、さらに個々のジャンルの学問からは見えてこなかった、新しい研究課題を掘り下げようとするものだ。本書の読者は、新しい「学問」のスタートに立ち会うことになるだろう。

では「神話・伝承学」とは、どんな切り口で研究を進めていくのか、そこにはこれまでの学問とはどのように違う面が見えてくるのか……。まず本章ではその大きな見取り図を示しておこう。

最初に登場してもらうのは、日本人なら誰もが知る有名な昔話の主人公である。桃から生まれて、鬼退治する少年。そう桃太郎である。しかし、そもそも桃太郎は、なぜ「桃」から生まれてくるのか。桃から生まれた少年が、どうしても鬼退治する力を持っているのか？

そんな素朴な疑問から「神話・伝承学」を始めよう。

一 桃太郎と『古事記』の接点とは

桃太郎といえば、誰もが知っている有名な昔話だ。桃から生まれた桃太郎がサル、イヌ、キジに黍団子きひだんごを与えてお供にし、「日本一」という旗を押し立てて、勇ましく鬼退治に行く姿は絵本などでも見たことがあるだろう。ところで、わたしが子どものときに桃太郎の話を聞いて思ったのは、桃から生まれた桃太郎がいるのならば、スイカやリンゴから生まれた「スイカ太郎」や「リンゴ太郎」はいるのか、という疑問だった。じつはわたしは桃が嫌いだったので（今も苦手）、大好きなスイカから生まれる「スイカ太郎」がいてほしいと思っていたのだった。

さて大人になって昔話や伝説の勉強を始めて、スイカ太郎やリンゴ太郎はいるのかと調べてみると、どうやら日本の昔話には鬼退治するスイカ太郎やリンゴ太郎、それにナシ太郎、メロン太郎もないようだ。鬼退治する少年は、桃から生まれた「桃太郎」と決まっているみたいだ。

そうすると次の疑問がわいてくる。なぜ鬼退治する少年は「桃」から生まれた桃太郎なのか。「桃」から生まれることと「鬼退治」することにはなにか関係があるのだろうか。

その疑問を解く鍵は――、なんと日本最古の書物とされる『古事記』のなかにあった。いうまでもなく『古事記』は神話・伝承学という学問にとっては、欠かせない本だ。『古事記』の神話世界については、第二章、第三章で詳しく

述べるので、ここでは簡単に紹介しておこう。

『古事記』は、平城京に遷都した二年後、和銅五年（七一三）に、稗田阿礼が口で語り伝えた神話や伝承を太安万侶が文字に書いて元明天皇（女帝）に献上したとされる本である。そこで平成二十四年（二〇一二）には、『古事記』が纂されてから一二三〇〇年目ということで、さまざまな記念イベントも行なわれた。

『古事記』という本は、全三巻からできている。上巻は「神代」の世界。天地の始まりから初代天皇の誕生までを語る神話だ。イザナキ・イザナミの国生み、アマテラスの岩屋ごもり、スサノヲのヤマタノヲロチ退治、稲羽の白兔、山幸彦・海幸彦の兄弟……、たぶんどこかで読んだり聞いたことがあるだろう。これら日本神話の代表的なエピソードは、みんな『古事記』に載っているものだ。

中巻は初代の神武天皇から応神天皇、下巻は仁德天皇から推古天皇まで。推古天皇は、あの有名な聖德太子の叔母さんだ。父天皇に疎まれ、辺境への戦いに出かけ、死後は白鳥となったという悲劇の皇子・ヤマトタケルの物語は中巻に出てくる。ようするに、中巻、下巻は、古代の天皇や皇子たちの物語である。したがって、上巻の神話の世界は、天皇が「神々の子孫」であることを証明するためのエピソードということになる。『古事記』の神話によれば、初代天皇の神武の祖母は、トヨタマビメという海神の娘で、その正体は「サメ」だった。天皇家というのは、太陽神のアマテラスの子孫と海神の娘「サメ」とが

（一）『古事記』が和銅五年（七一三）に成立したことの根拠は、『古事記』冒頭に付された「序」である。しかし奈良時代の正史である『続日本紀』には、『古事記』成立にかなする記述はない。これらの点から、『古事記』は後世の偽書ではないか、という説もある。近年では、三浦佑之氏が『古事記』が和銅五年に成立したと記す「序」は、平安時代初期に多氏によって追加されたものにすぎないこと、『古事記』の本文そのものは八世紀よりもさらに古層の七世紀の伝承を伝えていると述べている。三浦佑之「古事記講義」（文春文庫、二〇〇七年）、同「古事記を読みなおす」（ちくま新書、二〇一〇年）などを参照。

また以上の三浦説を受けて、斎藤英喜「古事記 不思議な「一三〇〇年史」（新人物往来社、二〇一二年）、同「古事記はいかに読まれてきたか」（吉川弘文館、二〇一二年）では、『古事記』と和銅五年成立が記された「序」は、平安時代初期の「日本紀講」の現場で作られたことを指摘した。この点は、本書第一章を参照のこと。



図 1



図 2

結婚して始まったというのが、『古事記』が語る神話の起源である。

一方、『古事記』から八年後の養老四年（七二〇）には、『日本書紀』が作られる。「記紀神話」と呼ぶように、このふたつの本は同じような日本神話を伝えているが、よく読むとかなり違いがある。『日本書紀』は中国を意識して作られた書物なので、当時の中国の人でも読めたというりっぱな漢文で書かれている。それにたいして、『古事記』は、ヤマトの国の古い言葉、とくに「語り」の口調を伝えようという工夫が随所に見える。

また稲羽の白兔の話で有名な出雲地方の神であるオホクニヌシの神話は、『古事記』に詳しく伝わっているが、『日本書紀』ではほとんど出てこない。出雲のオホクニヌシは、国の支配権をヤマト王権の始祖神であるアマテラスに譲ってしまう（実質は奪われたといったほうがよい）。オホクニヌシはヤマト王権に滅ぼされた地方豪族の象徴とされるのである。

『古事記』はその滅ぼした豪族の神のことを大切に扱う。滅ぼした神は、粗末に扱うと祟りを起こしたりして恐ろしいからだ。それは後に御霊信仰^{ごりょうけい}、怨霊信仰

図 1 出雲大社境内の稲羽の白兔とオホクニヌシ

図 2 出雲大社（島根県出雲市）

へと展開するものといってもいいだろう。⁽²⁾ 大きな注連縄しめなわがあつて、縁結びの神サマとして有名な出雲大社（島根県）を知らない人は少ないだろう。オホクニヌシは、その出雲大社に祭られている。『古事記』を読むと、出雲大社とは、滅ぼしたオホクニヌシが祟らないように丁寧ていねいに祭った神社であつたことがわかる。

実際、『古事記』には、出雲大社を粗末にしたために、十一代目の垂仁天皇すいにんの皇子ホムチワケが言葉を喋れなかったという、文字どおりオホクニヌシの祟りの話が出てくる。しかし、『日本書紀』ではもはや、そうした出雲の神々のことを恐れるような考え方はなかったようだ。それで『日本書紀』には出雲神話のことは詳しく出てこない。中国から学んだ、最新の儒学思想で脚色されているのが『日本書紀』だったからだ。

そのほかにも『古事記』には神々の面白い神話があるが、詳しくは第二章、第三章を読んでほしい。

二 桃太郎のルーツを求めて

さて、桃太郎の話題に戻ると、あらためて鬼退治する少年はなぜ「桃」から生まれるのだろうか。その理由を教えてくださいるのが、『古事記』の有名なイザナキ・イザナミ神話に出てくるエピソードだ。そしてそこには、意外なことに古代ヤマトと中国との密接な関係さえも見えてくる。

神話のなかで最初に結婚したのはイザナキ・イザナミの神々だ。ふたりの間

(2) 出雲大社の創建が「御霊信仰」のルーツとする説は、斎藤英喜『古事記 成長する神々』（ビイニングネットプレス、二〇一〇年）を参照。なお、通説では「御霊信仰」は、政治的に敗れた人物が祟りを起こさないように祭ることで、その成立は平安初期からとされている。

ブックガイド——神話・伝承学をさらに究めるために——

本書の読者が、さらに「神話・伝承学」を学んでいくために、ぜひとも読んでほしい本を紹介していく。なお、文庫、選書などで再刊されたものは、そちらの最新データを掲げる。

【原典を読む】

神話・伝承学を学ぶうえで『古事記』『日本書紀』は不可欠。しかし漢字のみで書かれている原文を読むのはきびしい。まずは読み下し文だけでも挑戦してほしい。文庫本で『古事記』『日本書紀』の原文（読み下し文）を読むなら、倉野憲司校注『古事記』（岩波文庫、一九六三年）、中村啓信『新版・古事記 現代語訳付き』（角川ソフィア文庫、二〇〇九年）、坂本太郎ほか校注『日本書紀』（全五巻、岩波文庫、一九九四～五年）がお勧め。

さらに新しい研究成果が盛り込まれたテキストとしては、西宮一民校注『古事記』（新潮日本古典集成、新潮社、一九七九年）。現代語訳はないが傍注がわかりやすい。また巻末の「神名の釈義」は、神の素性を知るうえで勉強になる。

神野志隆光・山口佳紀校注『古事記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）、小島憲之・直木孝次郎ほか校注『日本書紀』（全三巻、新編日本古典文学全集、小学館、一九九四～八年）は、最新の研究成果が盛り込まれ、現代語訳も付いている。『風土記』のテキストとしては、植垣節也校注『風土記』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）がお勧め。

いきなり原文はハードルが高いという人には、現代語訳もある。巷にはたくさん本が出ているが、なんといっても一番のお勧めは、三浦佑之『口語訳 古事記』（全三巻、文春文庫、二〇〇六～七年）。昔話の語りの口調ですらすらと『古事記』が読める。また注は、最新の研究が盛り込まれており、勉強になる。

『古事記』の注釈書もたくさんあるが、西郷信綱『古事記注釈』（全八巻、ちくま学芸文庫、二〇〇五～六年）は文庫本で読める古典的名著。一語、一語の言葉の意味の背後に隠されている「神話の構造」を読み解いていく。

*

本書によって「中世神話」なるものを知った読者も多いだろう。では中世神話の原典は何を読めばいいのか。とりあえず基本的なものを紹介する。大隈和雄校注『中世神道論』（日本思想大系、岩波書店、一九七七年）、石田一良注訳『神道思想集』（日本の思想、筑摩書房、一九七〇年）は、『倭姫命世記』『中臣祓訓解』『旧事本紀玄義』『宝基本記』など、中世神話に連なる神道書の基本が収録されている。筑摩版には、現代語訳も付いている。

*

その他「中世神話」は、以下のような有名な古典のなかにも織り込まれている。小島孝之校注訳『沙石集』（新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一年）、梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』（全四巻、岩波文庫、一九九九年）、兵藤裕己校注『太平記』（全六巻、岩波文庫、二〇一四年）刊行途中、市古貞次校注『御伽草子』（上下、岩波文庫、一九八五～六年）。

*

*

*

昔話や伝説の原典は、柳田国男編のものが文庫で読める。

柳田国男『日本の昔話』『日本の伝説』（新潮文庫、一九七七年・一九八三年）。さらに専門的な情報を知るには、関敬吾編『日本昔話大成』（全一二巻、角川書店、一九七八～八〇年）、福田晃ほか編『日本伝説体系』（みづうみ書房、全一五巻、一九八二～九年）。

*

*

*

ギリシア神話の原典は、ギリシア語の原文は無理なので、信頼できる日本語訳としては、アポロドーロス著／高津春繁訳『ギリシア神話』（岩波文庫、一九五三年）がお勧め。

【神話研究の基本を学ぶ】

神話を学ぶうえで基本となる概説書、研究書を紹介する。

まず神話の研究はここから始まるという基本図書、西郷信綱『古事記の世界』（岩波新書、一九六七年）。新書だが、現代の『古事記』研究、神話研究の基本を作った、歴史的な名著。宣長の『古事記伝』とレヴィ＝ストロースの構造神話学の方法とをクロスさせながら、『古事記』の独自の構造を解説していくスリリングな読書体験ができる。その他、西郷の研究書として『古事記研究』（未来社、一九七三年）、『古代人と夢』（平凡社ライブラリー、一九九三年）、『神話と国家——古代論集

——』(平凡社、一九七七年)もぜひ目を通してほしい。

また、「記紀神話」として一括されてきたふたつの神話が、それぞれ異なる神話テキストとしての世界観、論理をもつことを説き明かした神野志隆光『古事記と日本書紀』(講談社現代新書、一九九九年)、同著者の専門書である『古代天皇神話論』(若草書房、一九九九年)、『変奏される日本書紀』(東京大学出版会、二〇〇九年)も精読してほしい。

一方、『古事記』の語りとしての魅力を説き明かし、また『古事記』序文の偽作説を唱えたのは、三浦佑之『古事記を読みなおす』(ちくま新書、二〇一〇年)。これを読めば三浦説のすべてがわかる。同著者の本としては、『古事記講義』(文春文庫、二〇〇七年)、『古事記のひみつ——歴史書の成立——』(吉川弘文館、二〇〇七年)、少し硬めの本としては、『古代研究——列島の神話・文化・言語——』(青土社、二〇一二年)。また著者の昔話研究の原点となった『村落伝承論——『遠野物語』から——』(青土社、二〇一四年)も、近年改訂版が出た。

学術専門書だが、呉哲男『古代日本文学の制度論的研究——王権・文字・性——』(おうふう、二〇〇三年)は、八世紀における『記』『紀』の相互補完関係を解き明かし、「現代思想」と神話研究がクロスする様相を教えてくれる。

『古事記』のなかのササノヲ、オホクニヌシ、アマテラスなどの神々が、成長・変貌していく姿を追っていく斎藤英喜『古事記 成長する神々——新しい「日本神話」の読み方——』(ビィング・ネット・プレス、二〇一〇年)や、また同著者が監修した一般向け入門書として二五版まで出ているロングセラー、『とてももなく面白い』『古事記』(PHP文庫、二〇一二年)もカードゲームのキャラクターのようなイラストがあり好評。

文字で書かれた『記』『紀』神話にたいして、沖縄や中国少数民族が伝える無文字の古層の神話を探究していく研究としては、藤井貞和『古日本文学発生論』(増補新装版、思潮社、一九九二年)、古橋信孝『古代歌謡論』(冬樹社、一九八二年)、『神話・物語の文芸史』(ベリかん社、一九九二年)、工藤隆『古事記の起源——新しい古代像をもとめて——』(中公新書、二〇〇六年)などがある。

文字で書かれる以前の「神話」は、歌謡として歌い継がれてきた祭祀の現場をリアルに教えてくれる。

「中世日本紀」や「中世神話」の研究の基本を学ぶならば、まずは山本ひろ子『中世神話』(岩波新書、一九九八年)。同著

者の『変成譜——中世神仏習合の世界——』（春秋社、二〇〇〇年）、『異神——日本中世の秘教的世界——』（上下、ちくま学芸文庫、二〇〇三年）もお勧め。さらに「中世神話」とともに、近世、近現代にわたる神話の変貌の全体像をつかむには、斎藤英喜『読み替えられた日本神話』（講談社現代新書、二〇〇六年）。同著者の『アマテラス——最高神の知られざる秘史——』（学研新書、二〇一一年）、『荒ぶるスサノヲ、七変化——〈中世神話〉の世界——』（吉川弘文館、二〇一二年）もある。

『古事記』成立後一三〇〇年の「受容史」について勉強するには、斎藤英喜『古事記 不思議な一三〇〇年史』（新人物往來社、二〇一二年）、『古事記はいかに読まれてきたか——〈神話〉の変貌——』（吉川弘文館、二〇一二年）、『異貌の古事記——新しい神話が生まれるとき——』（青土社、二〇一四年）。

*

*

*

ギリシア神話について学ぶ基本図書としては、呉茂一『ギリシア神話 新装版』（新潮文庫、一九九四年）、西村賀子『ギリシア神話——神々と英雄に出会う——』（中公新書、二〇〇五年）。

比較神話学の基本を学ぶならば、大林太良『神話学入門』（中公新書、一九六六年）、吉田敦彦『日本神話の源流』（講談社現代新書、一九七六年）は古典的名著。

神話学の基礎や学説史については、吉田敦彦＋松村一男『神話学とは何か』（有斐閣新書、一九八七年）、松村一男『神話学講義』（角川叢書、一九九九年）、P・M・シュールほか著／松村一男＋久米博ほか訳『神話の系譜学』平凡社、一九八七年）。またプラトンにはじまる「アトランティス伝説」の生成をわかりやすく説き明かした庄子大亮『アトランティス・ミステリー——プラトンは何を伝えたかったのか——』（PHP新書、二〇〇九年）は、ギリシア神話生成の背景も教えてくれる。

アフリカの神話を構造分析した名著山口昌男『アフリカの神話世界』（岩波新書、一九七二年）、『神話的思考』を人類最古の「哲学」として説き明かす中沢新一『人類最古の哲学』（講談社選書メチエ、二〇〇二年）は必読。さらに同著者の初期の研究として『チベットのモーツァルト』（講談社学術文庫、二〇〇三年）、『雪片曲線論』（中公文庫、一九八八年）、『虹の理論』（講談社文芸文庫、二〇一〇年）などもお勧め。

【昔話・伝説の世界へ】

柳田国男、折口信夫の著作は、いま文庫で読める。

柳田国男『遠野物語』『妖怪談義』（角川ソフィア文庫、二〇〇四年・二〇一三年）、安藤礼二編『折口信夫文芸論集』『折口信夫天皇論集』『折口信夫芸能論集』（講談社文芸文庫、二〇一〇～二二年）。

その他両者の全集も『柳田国男全集』はちくま文庫、『折口信夫全集』は中公文庫に入っている。なお、折口信夫は、新しい編集による全集も中央公論社から刊行されている。

また柳田国男や折口信夫の学問的、思想的な可能性を論じたものとして、赤坂憲雄『柳田国男の読み方——もうひとつの民俗学は可能か——』（ちくま新書、一九九四年）、鶴見太郎『柳田国男入門』（角川選書、二〇〇八年）、柄谷行人『遊動論——柳田国男と山人——』（文春新書、二〇一四年）、安藤礼二『神々の闘争 折口信夫論』（講談社、二〇〇四年）、『折口信夫』（講談社、二〇一四年）。

*

*

*

「妖怪学」や民俗信仰の新しい研究視点を学ぶには、いまや古典的名著ともいえる、小松和彦『憑霊信仰論』『神々の精神史』（講談社学術文庫、一九九四年・一九九七年）は必読だ。さらに小松妖怪学の入門書としては、小松和彦『妖怪文化入門』（角川ソフィア文庫、二〇一二年）、小松和彦編『妖怪学の基礎知識』（角川選書、二〇一一年）。専門的な研究書としては、小松和彦編『日本妖怪学大全』（小学館、二〇〇三年）。

また柳田民俗学が正面から扱わなかった「異人殺し」の問題や、シャーマンと伝説の発生などの具体的な事例がスリリングな小松和彦『異人論——民俗社会の心性——』（ちくま学芸文庫、一九九五年）、『悪霊論——異界からのメッセージ——』（ちくま学芸文庫、一九九七年）などもある。

なお、シャーマニズム研究の古典、ミルチア・エリアーデ著／堀一郎訳『シャーマニズム——古代のエクスタシー技術——』（上下、ちくま学芸文庫、二〇〇四年）も文庫本で読める。シャーマンについて学ぶならば、必読だ。

無文字社会で伝えられる神話・伝承を知るには、川田順造『無文字社会の歴史——西アフリカ・モシ族の事例を中心に——』（岩波現代文庫、二〇〇一年）、『口頭伝承論』（河出書房新社、一九九二年）。

都市伝説については、ジャン・ハロルド・ブルンヴァン著／大月隆寛ほか訳『消えるヒッチハイカー——都市の想像力のアメリカ——』（新宿書房、一九八八年）、常光徹『学校の怪談——口承文芸の研究1——』（角川ソフィア文庫、二〇〇二年）。

【新しい研究の最前線へ】

近年の新しい研究動向を知ることができる学術専門書を紹介する。本書の執筆陣も最前線にたっている。

佐藤弘夫『アマテラスの変貌——中世神仏交渉史の視座——』法蔵館、二〇〇〇年

『偽書の精神史——神仏・異界と交感する中世——』講談社選書メチエ、二〇〇二年

斎藤英喜『いざなぎ流 祭文と儀礼』法蔵館、二〇〇二年

『増補・陰陽道の神々』思文閣出版、二〇一二年

保坂達雄『神と巫女の古代伝承論』岩田書院、二〇〇三年

『神話の生成と折口学の射程』岩田書院、二〇一四年

松本郁代『中世王権と即位灌頂——聖教のなかの歴史叙述——』森話社、二〇〇五年

田中貴子『外法と愛法の中世』平凡社ライブラリー、二〇〇六年

猪股ときわ『古代宮廷の知と遊戯——神話・物語・万葉歌——』森話社、二〇一〇年

船田淳一『神仏と儀礼の中世』法蔵館、二〇一一年

伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』法蔵館、二〇一一年

山下久夫＋斎藤英喜編『越境する古事記伝』森話社、二〇一二年

原克昭『中世日本紀論考——註釈の思想史——』法蔵館、二〇一二年

岡部隆志『神話と自然宗教——中国雲南省少数民族の精神世界——』三弥井書店、二〇一三年

阿部泰郎『中世日本の宗教テキスト体系』名古屋大学出版会、二〇一三年

権東祐『スサノヲの変貌——古代から中世へ——』法蔵館、二〇一三年

アングソヴァ・マラル『古事記 変貌する世界——構造論的分析批判——』ミネルヴァ書房、二〇一四年

小川豊生『中世日本の神話・文字・身体』森話社、二〇一四年

津田博幸『生成する古代文学』森話社、二〇一四年

(斎藤英喜)

あとがき

僕は一〇年ほど前から勤め先の佛教大学で「神話・伝承学」という授業を担当してきました（なお、授業名の発案者は、同僚の八木透先生です）。その授業では、古代の神話世界の面白さ、奥深さを伝えるために、学生たちがよく知っている昔話の桃太郎や一寸法師のことと繋ぎ合わせながら話しました。またマンガやアニメ、ゲームの世界と神話の関係なんかも、ちょくちょく触れたように思います。

この本は、そうした僕の授業実践にもとづきながら構想しました。執筆者のなかには、実際に僕の授業を聴いてくれた、当時の学生さんも入っています。でも、そうした書き手の何人かは、ふだん書いている「論文」とは違う文体で書くことの大変さを体験したかと思います。また僕の昔からの研究仲間にも加わってもらいました。ベテランの授業実践も、この本には生かされていることと思います。いろいろと難しい「注文」をつけてしまいました。まずは執筆してください。皆さんに感謝を。

出版に関しては思文閣出版の原宏一氏のご尽力を得ました。感謝申し上げます。また営業担当であり、コラムの執筆者ともなった井熊勇介さんには、企画の立ち上げからバックアップしてもらいました。そして編集実務を担当してくれた三浦泰保さんには、念入りな原稿チェックをしてもらいました。編集者としての三浦さんの熱意に、多くの執筆者たちが感激したはず。皆に代わって、お二人に感謝を。

さて、この本の基本方針は、「最新の研究成果をわかりやすく紹介する」ということにあります。執筆者はもちろんのこと、編者の僕もかなり努力はしましたが、さあ、それはどれぐらい実現できているでしょうか。読んでいただいた読者の皆さんの「判定」をお聞きしたいと思います。

二〇一五年八月 盛夏の京都で

斎藤英喜

執筆者紹介（掲載順、*は編者）

* 斎藤 英喜（さいとう・ひでき）

1955年生。日本大学文学研究科博士課程満期退学。佛教大学歴史学部教授。

『古事記はいかに読まれてきたか——〈神話〉の変貌——』（吉川弘文館、2012年）、『異貌の古事記——あたらしい神話が生まれるとき——』（青土社、2014年）、『陰陽師たちの日本史』（角川選書、2014年）。

Andassova Maral（アンダソヴァ・マラル）

1982年生。佛教大学文学研究科博士課程修了。佛教大学非常勤講師。

『古事記 変貌する世界——構造論的分析批判——』（ミネルヴァ書房、2014年）、「古事記のなかの出雲——ホムチワケのシャーマニックな体験から——」（『現代思想 出雲』2013年11月）、「古事記における「シャーマニズム」——葦原中国と命名することについて——」（『日本文学』64巻5号、2015年5月）。

稲生 知子（いのう・ともこ）

1971年生。名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期満期退学。芝浦工業大学・成蹊大学非常勤講師。

「「哀れ」なるヒルコへ——神話生成の現場としての日本紀竟宴——」（『日本文学』49（6）、2000年6月）、「『古事記』にとしての倭建命——「言葉」をめぐる問題から——」（『古代文学』50、2010年）、「教科書を超える〈ヤマトタケル〉——女性の視点から——」（『日本文学』64（1）、2015年1月）。

渡部 亮一（わたなべ・りょういち）

1970年生。立命館大学大学院文学科日本文学専攻単位取得退学。立命館大学文学部非常勤講師。

「終わらない聖典——善珠のまなざされる体験」（山口敦史編『古代文学会叢書4 聖典と注釈——仏典注釈から見る古代——』武蔵野書院、2011年）、「善珠『唯識義燈増明記』の「外道老荘」——注釈から生み出される歴史認識」（『佛教大学歴史学部論集』2、2012年）、「古代日本国の「神力」——善珠の注釈活動を中心に」（『論究日本文学』100、2014年）。

井熊 勇介（いくま・ゆうすけ）

1978年生。佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻修士課程修了。株式会社思文閣出版勤務。

「『日本霊異記』上巻序文と「日本紀」言説」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第37号、2009年3月）。

花川 真子（はなかわ・まさこ）

1986年生。京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士後期課程在籍中。

船田 淳一（ふなた・じゅんいち）

1977年生。佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻博士課程修了。金城学院大学文学部日本語日本文化学科准教授。

『神仏と儀礼の中世』（法蔵館、2011年）、「西大寺十代長老清算」考——舍利信仰と宗教活動をめぐって——」（『日本仏教総合研究』12号、2014年）、「中世の春日信仰と死者供養——白毫寺の一切経転読儀礼と穢れをめぐって——」（東北大学大学院文学研究科日本思想史研究室、富樫進編『カミと人と死者』岩田書院、2015年）。

権 東 祐（くおん・とんう）

1972年生。佛教大学博士後期課程修了。韓国円光大学校円仏教思想研究院・研究教授。『スサノヲの変貌——古代から中世へ——』（法蔵館、2013年）、「神話解釈から読み取る「三韓」認識変化とスサノヲ」（『日本学研究』第45号、檀国大学校日本研究所、2015年）、「教派神道と「近代神話」研究の可能性模索——韓国に流入された神道、実行教・神理教を中心として——」（『日本研究』第64号、韓国外語大学校日本研究所、2015年）。

村 田 真一（むらた・しんいち）

1978年生。佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻博士後期課程修了。佛教大学非常勤講師。

『八幡宇佐宮御託宣集』における「幽玄」について——託宣への注釈と思考——」（『日本文学』57-4、2008年4月）、「『八幡宇佐宮御託宣集』における「霊神」の位相」（『日本宗教文化史研究』13-2、2009年11月）、「託宣と八幡神」（『佛教大学大学院紀要』39、2011年3月）。

梅 野 光 興（うめの・みつおき）

1962年生。大阪大学大学院文学研究科前期課程修了。高知県立歴史民俗資料館学芸員。「場所と出来事」（小松和彦・香月洋一郎ほか編『講座日本の民俗学2 身体と心性の民俗』雄山閣出版、1998年）、「天中姫宮、米の本地——いざなぎ流と巫女信仰——」（松尾恒一『国立歴史民俗博物館研究報告』第142集、2008年）、「荒平・ダイバ・山の神——中四国の神楽の鬼の舞——」（『中国地方各地の神楽比較研究』島根県教育庁古代文化センター、2009年）。

武田比呂男（たけだ・ひろお）

1959年生。明治大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程満期退学。十文字学園女子大学人間生活学部文芸文化学科教授。

共編著『躍動する日本神話——神々の世界を拓く——』（森話社、2010年）、「環境・文学・精神史——平野仁啓の仕事に学ぶ——」（日本文学協会『日本文学』62巻5号、2013年5月）、「よみがえりと転生——『日本霊異記』をめぐって——」（明治大学文学部『文芸研究』123号、2014年3月）。

鈴木耕太郎（すずき・こうたろう）

1981年生。立命館大学大学院文学研究科日本文学専修博士後期課程在籍中。

『京都まちかど遺産めぐり』（共編、ナカニシヤ出版、2014年）、「スサノヲと祇園社祭神——『備後国風土記』逸文に端を発して——」（『論究日本文学』92号、2010年）、「牛頭天王縁起」に関する基礎的研究」（『立命館文学』630号、2013年）。

庄子大亮（しょうじ・だいすけ）

1975年生。京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。佛教大学・立命館大学等非常勤講師。

『アトランティス・ミステリー——プラトンは何を伝えたかったのか——』（PHP 新書、2009年）。

Premoselli Giorgio（プレモセリ・ジョルジョ）

1983年生。佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻博士課程満期退学。佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻研究員。

「陰陽道神・泰山府君の生成」（『佛教大学大学院紀要』第42号、佛教大学大学院、2014年）。

星 優也（ほし・ゆうや）

1991年生。佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻修士課程在籍中。

「荒木株と株講——記念碑・系図の祭祀と系譜の世界——」（『福知山市三和町草山の民俗——2013年度「歴史文化フィールドワーク」調査報告書——』2014年）。

谷本由美（たにもと・ゆみ）

1977年生。同志社女子大学大学院博士課程修了。大阪教育福祉専門学校特任講師／奈良保育学院非常勤講師。

「二〇一一年度小学校教科書の「いなばのしろうさぎ」——多義性の視点から日本神話再登場のあり方を考える——」（『児童文学研究』44号、2011年）、「明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり——チェンバレン「ちりめん本」から巖谷小波「日本昔噺」へ——」（『同志社女子大学生活科学』45号、2011年）、「児童向け「いなばのしろうさぎ」における挿絵の変遷——「和邇」の描かれ方に表れた古事記解釈——」（『児童文学研究』45号、2012年）。

しん わ でんしょうがく しょうたい
神話・伝承学への招待

2015(平成27)年 9 月20日発行

定価：本体2,300円(税別)

編 者 斎藤英喜

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-751-1781(代表)

デザイン 井上二三夫

印 刷 株式会社 図書印刷
製 本

©Printed in Japan

ISBN978-4-7842-1813-4 C1020